

二十九 小小説拾遺一 或る僧の物語

これはある人の語るよもやま話である。当人は、まだ年号が使われていた昔、地平らかに天成る時代に聞いたと言っている。そのころ蝶だったとほのめかすその人物の素生は、わたしにもよくわからない。話の出どころも確かでない。けれども、ときたま聞く話のなかには内容に味わいがあり、文字にするのがおもしろいものもあるので、短い小説つまり街談巷語道聴塗説の掌篇という意味をこめて、仮に「小小説拾遺」と名づけて収録する。

そのころ、説法がじょうずだと評判をとった僧がいた。住持を務める寺のある国だけでなく、近隣の数国の中でも最年長の説教僧であった。人の言うところでは、歳は九十に近かった。和尚の説教を聴いたという人々の話をつづり合わせると、真偽は分からないが、なかなか数奇な因縁の人生が浮かび上がる。寺に生まれて十二人の子のなかの末弟であつたらしい。

これを聞いても、その国の現代人なら不思議には思わないかもしれないが、イスパニアの人なら眉に唾しただろう。しかし、高麗や越でも、僧が妻をもつことはゆるされなかつ

た。僧が結婚するというのはそれほど大それたことだった。北歐に結婚する僧が現われるについては、宗教戦争という血みどろの戦いを経なければならなかった。その国の僧が、結婚し一家をなして寺を営むようになったのは、つい百五十年前のことである。その先例になったのは革命的な宗教家であった。宗教家と言ったのは、結婚したその人物は僧ではなかったからである。以前は都の東北の大寺の僧であったが、その寺の知恵第一と言われた上人が巷に出て徹底して単純な教えを説き始めると、その人に従った。旧仏教の僧たちが、朝廷にその集団を弾圧させる。師や弟子たちは僧籍を剥奪され、各地に流刑に処された。僧ではないとされた人は配所の生活で妻をもったが、剃髪したまま非僧非俗の愚禿と称し、師の教えをさらにつきつめて革命的な宗教家になった。流刑を解かれると、愚禿は教えを説いて回る。時を経て、血脈がその信仰を唱道し、いつのまにか押しも押されぬ教団になると、その宗派の僧が妻帯することをとがめる者は無くなった。そして百五十年前の政変で、他の宗派の僧もそれを真似できるようになったのである。

話が脇道にそれたけれども、和尚が嘆くには、そのころ、そんなことまで解説しなればならない世になっていた。それにしても十二人の子というのは多い。十六人の子を産んだマリア・テレジアのような女性はめつたにいないから、じつはその子たちは二人の妻から生まれたそうだ。和尚の父は小さな寺の僧だったが、大した人物だったらしい。ところ

の郡守のまつりごとを助けて街道を整備するのに奔走し、またほかの公事にも尽くした。寺には二人の妻があつた。言うまでもないことだが、その国はイスラム国ではなかつたから、一人が国法上の妻でもう一人は妻ではなかつた。いくら妻をめとることのできる宗派の僧だとしても、寺に二人の女性を入れることにはまわりの人々が眉をひそめる。門徒がしだいに減り、数えてみればついには二十数家というありさま。

寺は貧窮したが、父はなんとか、男の子たちを都の戒壇院に送り出し、僧にした。格式あるように戒壇院と言つたが、僧籍を剝奪された人の始めた教団は、大学とよばれる教育機関をつくつて僧を養成したのである。それは特別のことではなく、ほかの大きな教団もみな大学を擁していた。当時は末世だからそもそも戒壇院などは存在しなくて、僧になりたくないものはだれでも簡単になれたのである。のちに、いなかに職を得られなくてたくさんの人々が大きな町に出たが、墓土地を求めるようになる、悪知恵のはたらく者が、名も知られない寺で数日過ごしただけで印可を得たと称して僧になり、新しく寺を開いて墓地を売り出すことも起きるしまつであつた。じつにおそれいっただ世ではあつた。

和尚は、説教のあいまには身のうえ話をした。それによれば、妻は七歳年上だという。どうも、その人は寺を継いだ兄の妻だった人らしい。兄がいくさかなにかで亡くなつて、

和尚が寺と兄嫁を継承することになったのである。これを聞くとまた、若い人たちのなかには嫌悪の念をいだく人がいるかもしれない。だが、モンゴルの高原から海を渡った片州まで、東方の国々ではありふれたことであつた。そのころ、巷間の箱芝居で評判をとつたドラマに、立派な教育者の妹を題材にして、姉が亡くなるとその夫のところへ嫁いだという物語があつた。その妹も再婚だつた。けれども、和尚の人生が、十一歳も年上の一度離婚した女性を妻にしたライオン、プランタジネット家のヘンリー二世とくらべて、波乱が少なかつたとはだれにも言えないだろう。

実際、和尚がおもしろおかしく自分のことを語るなかに、多くの苦勞を高齡になるまでによく消化して、人生を深く受けとめていようすが表われていた。年上の妻を大切にしていることもうかがわれた。将来を嘱望された壮年の息子を失つたことも淡々と語るのであつた。しぶいがよく通る大きな声で、闊達な口調である。そのころにはすでに聞かれなくなつていたが、節をつけて説教する説教節を語ることもできた。息子やほかの僧に説教節を伝授しようとしたが、受け継げる者は結局出なかつたという。地元の法座では、その方言で親しみやすく語つた。身をおとしめて聴衆に近づけるために、パチンコにも行くし、町の中心部の居酒屋にも行って、そこに居合わせた人や別の寺の住職と大いに飲む、などなど。殺生を禁じられた僧の身でありながら魚釣りにも行き、人々からうしろ指をさ

されると白状もする。法座の椅子から立って、聴く人に近づき、その前の畳に腰をおろして語ったり、何かをけなしたりするときには、足で蹴るようなしぐさをして、墨染めの衣のすそから脛が見えることもあった。

しかし、聴衆を引きつける話題をまじえた話法をよく聴けば、革命的な宗教家の説いた「信」を的確に語って、信仰心を掘り起こしていることがわかった。聴者のなかからしいにこの和尚を慕う人の数が増え、説教を聴くのが楽しみなファンまで生まれた。父の代に衰退した寺は復興した。活動的な和尚の評判は遠国にまで知られるようになり、講師を依頼されることが多くなる。ついには他国に寺を建立し、その門徒の数は元来の寺の何倍にも達したということだ。

自身も同様の生活を送り庶民の暮らしを理解している和尚は、高齢になると口をはばかりることが少なくなつて、考えを直言するようになった。西洋から入ってきた民主主義とかいうものを真似て、科擧の代わりに入れ札で政府の高官を選ぶようになっていたその国で、和尚の寺は時の宰相の本貫の近くにあって、もろこしに倣つて、先祖が離れた土地を本貫とする策が有利だったからである。その入れ札が行なわれる前日に、たまたま郡内の寺で説教した和尚は、入れ札には「バカタレ」と書いて、ついでに法官の評定にバツ印を書け

と勧めた。もちろんそれは、政治的な扇動ではなく、世を憂える人の愚痴もしくは絶望であつた。そのころのいなかの民草が生活に苦しむありさまを見て、高齢の僧は、たまらなくなげかわしく思つたのである。

和尚はまた、法座で次のような話もした。近隣の村で、娘の精神に変調のさまを見て母親がある宗派の僧に加持祈禱を頼んだが、改善せず、結局病院に入院することがあつた。それを憐れんだ和尚は、他人のいる前でその僧を、「いまの世の中で、いくら困つた母親に頼まれたからといって、加持祈禱をするとはなにごとか」と批判したそうだ。すると、一年もしないうちにその僧が亡くなつたという。別の病因があつたとしても、無念と失意をもたらしした非難が遠因だつたかもしれない。自責の念があつたはずなのに、和尚は、それを法座で人に語つた。ほんとうの信仰のあり方を聴衆に語ることが任務だという信念があつたのだろう……。

以上が採録者の伝聞した或る僧の物語である。話者はこれ以上の逸話を知らなかつたようだ。文字におこした年がいつだつたかは失念した。